

## ハヤブサの落とし物

溝田 浩美  
(ひとはく地域研究員)

### ハヤブサについて

ずば抜けた飛翔力を利用して、主に飛んでいる獲物を足指のつめで捕まえる昼行性猛禽である。狩をするために障害物のない広い空間と、営巣場所として切り立った崖を必要とすること



から、日本ではほとんどのハヤブサが海沿いに生息している。水平飛行時の最高速度は時速100km前後でチーターと同じくらいであるが、急降下の際には、300kmを超えることもあると考えられている。食物はほとんどが鳥類で、一般にドバト、ムクドリ、ツグミ、タゲリ、ヒヨドリ、コガモなどが高い割合を占めるが、地域によってかなりの差がある。(日本動物大百科、平凡社より)

しかし、日本でハヤブサの食性については殆ど調査されておらず、数例の報告があるのみである。

### スケッチは貴重な戦勝品



このハヤブサは鉄塔を見張り場として前夜から餌となる鳥を待ち伏せし、捕らえた鳥をこの鉄塔の一番上で調理していた。ハヤブサは効率の悪い翼の先などは食べ残すことが多く、この食べ残しをカラスやトビが狙って来ている。この食べ残しを私は秋から春の間、毎日拾い続けた。食べ残しが鉄塔の上に見えるのに私には取りに行くことが出来ず、ただ落ちてくるのを待ち、運良くカラスたちより先に見つけた時のみ手に入る貴重な物である。そのスケッチが今回の“私の宝物”である。

### ハヤブサの狩と食卓にのぼる鳥たち

このハヤブサはアオバトを主食としており、その次にキジバトを多く食べていた。鉄塔の近くには常にドバトがいるにもかかわらず、よほど空腹でない限り手を出すことはなかった。なかなかのグルメである。

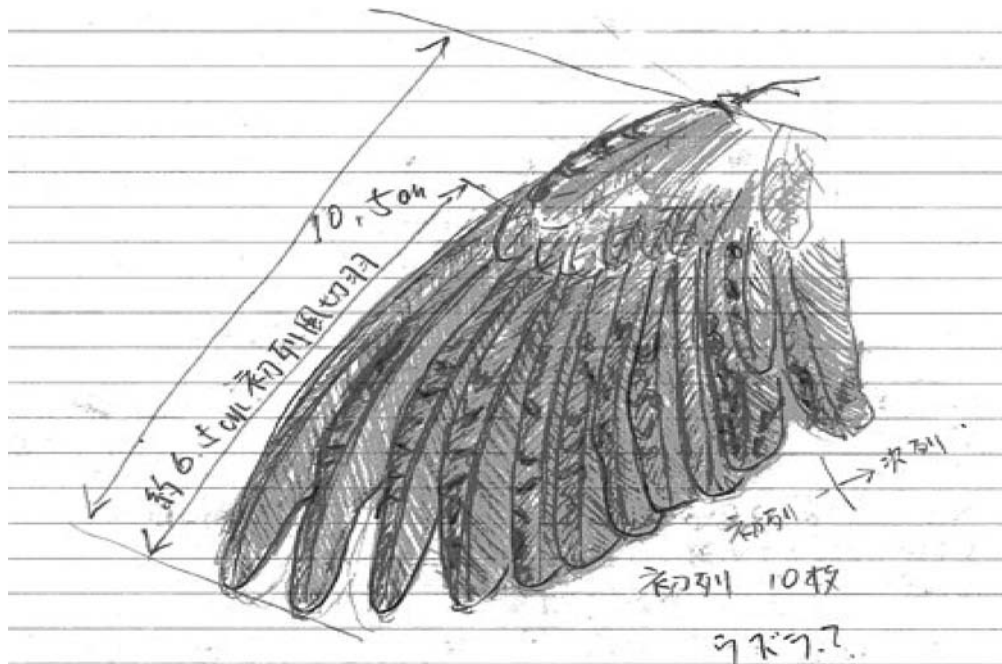
秋の渡りの時期には終日この鉄塔で見かけることも多く、渡りの鳥を狙っていたと考えられる。この時期は兵庫県下でも姿を見ることの難くなった鳥も回収でき、われわれの目に留まらない鳥の姿も、ハヤブサの目には見えていたようである。渡り鳥では、アカショウビン、オオヨシゴイ、ジュウイチなどが餌となっていた。4期のうちアカショウビンは3期連続で回収

できた。そして、驚くべきことに絶滅危惧種のオオヨシゴイまで食べていた。

ツグミ類はデザートといったところか？トラツグミ、ツグミ、シロハラだが、これだけでは十分空腹を満たすことが出来ないようで、他の鳥もいっしょに回収されることが多かった。

それから、不思議なことに、ここではハヤブサと一緒に鉄塔にいるムクドリはほとんど食べられることはなかった。

そのほかにも、カイツブリ、コガモ、バン、ケリ、ツバメ、カケス、ウズラ、オシドリ、ヒヨドリ、カワラヒワ、スズメ、アブラコウモリなどがハヤブサの食卓を賑わした。



## ハヤブサの死

近所の人からの通報でこのハヤブサが死んでいるのを見つけたのは2005年12月7日のことだった。夜の8時過ぎのことだが、まだぬくもりが残っていた。暗くなってからの狩で、獲物を深追いしすぎたのか、頭から地面に激突した様子だった。ハヤブサのように非常に速い飛行速度で獲物を追う狩の方法は、食べ物を手に入れるのも命がけだということかもしれない。数年にわたり追いつづけたハヤブサのあまりにあっけない最期だったが、偶然が重なって私の手元にハヤブサが戻ってきたのがせめてもの救いだった。

## 最後に

残念なことだったが、このハヤブサの死をひとつの区切りとして、今まで集めてきたデータを少しずつ形にしていこうと思う。

鳥の世界に引き込んでくださった江崎先生はじめ、この発表の機会を与えてくださった大谷先生や田中先生、陰で支えてくれた主人や子供たちに感謝したい。

そして何よりも、いくら眺めていても見飽きることのない、予想を裏切りいつも新しい世界を見せてくれるこのすばらしい自然の営みに感謝したい。